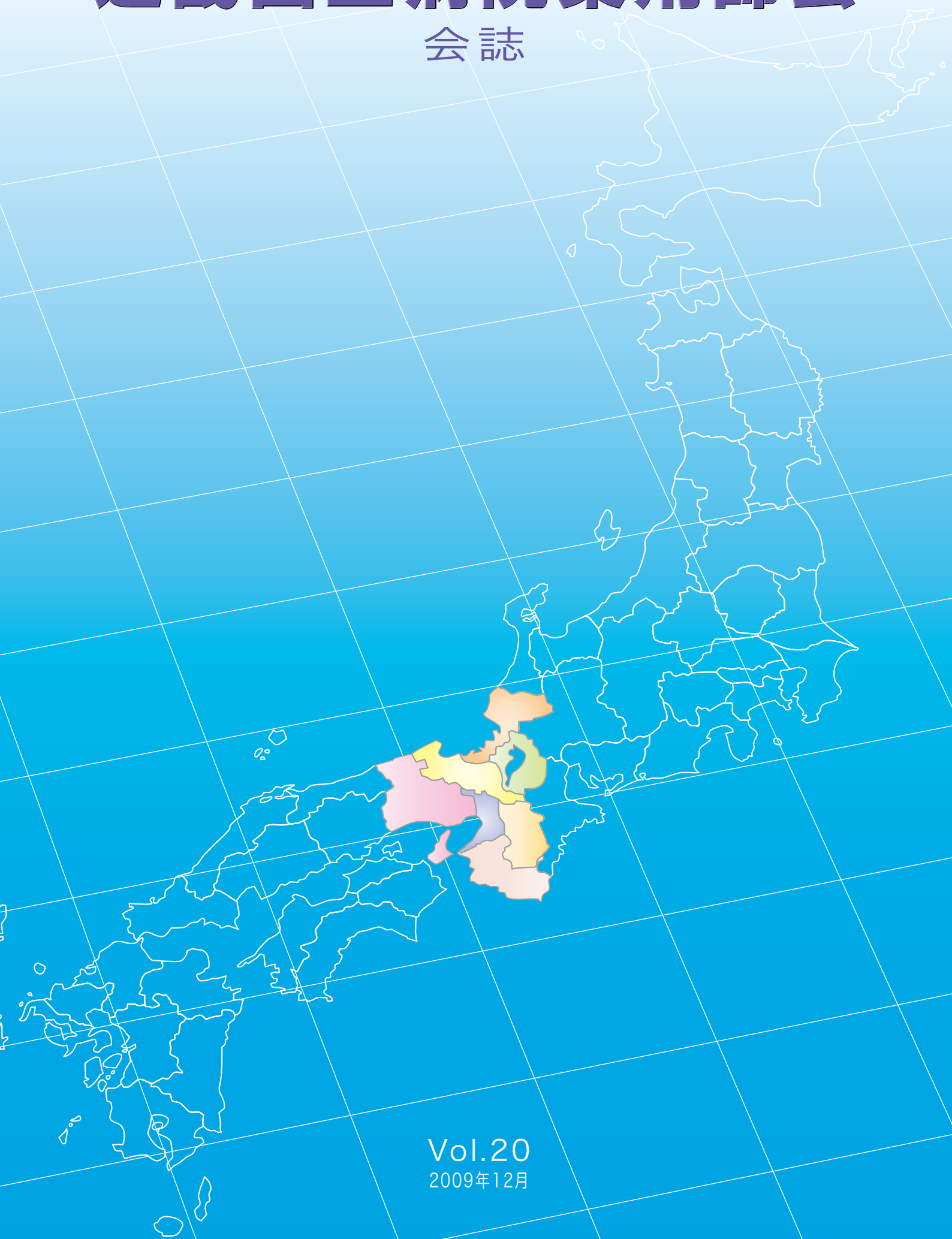


# 近畿国立病院薬剤師会

会誌



Vol.20  
2009年12月

## 目 次

提言（薬剤部科長）	2
～～『無駄なこととは』～～	
滋賀病院 薬剤科長	
堀内 保直	
薬剤科紹介 宇多野病院	3
平成 21 年度近畿国立病院薬剤師会臨時総会報告	6
近畿中央胸部疾患センター	
宮部 貴識	
臨時総会講演会（呼吸器感染症）の感想	7
近畿中央胸部疾患センター	
鷺巣 佳子	
第 1 7 回クリニカルファーマシーシンポジウムに参加して	8
福井病院	
中西 陽一	
第 63 回国立病院総合医学会に参加して	9
大阪医療センター	
東 さやか	
第 19 回日本医療薬学会年会に参加して	10
大阪南医療センター	
田路 章博	
編集後記	12

## 「提言」

～～『無駄なこととは』～～

滋賀病院 堀内 保直

無駄なことについて考えてみようと思います。「無駄なこと」とは文字通り役に立たないことですが、ちなみに、辞書を繰ると無駄に関する熟語が見つかり無駄足、無駄口、無駄死、無駄使、無駄花、無駄話、無駄骨などが載っています。

これらの熟語について少し考えてみます。無駄足、無駄骨は歩いたためにあるいは努力をしたけれど疲れてしまい何も得るものがなかったかもしれませんが、もしもその人が活動的でない人で日頃から専らデスクワークのみで毎日を作り過ごしていた人であったならば久しぶりの適度な運動になり、あるいは気分転換になったかもしれません（これは私のこと?）。また、無駄話、無駄口では仕事をサボって遊んでいるかもしれませんが、コミュニケーションを取ることで人間関係が潤滑になったり、もしかすれば話の中に仕事の上で役立つ内容があったりすることがないとも言えません（皆さんにも心当たりがあるのでは）。無駄使は大概が浪費になるのでしょうか、場合によっては高い授業料を払ったということもあるのではないのでしょうか（趣味のお金は何でしょう）。しかし無駄花は自己満足にはなるかもしれませんが役に立ちそうにはないですし、無駄死はやはり死んでしまえばおしまいです。

ところで仕事ではどうでしょう。病院薬剤師は調剤業務の習得から始まり、製剤・無菌調製、服薬指導などの病棟業務、薬務、治験、研究など様々な業務があり、専門知識を必要とする仕事の他にも薬品の請求や帳簿作成から資料作成など事務的な仕事も多くあります。さらに人がいない場合には薬剤師の仕事以外の雑役も片付けなくてはならないかも知れません。このように様々な内容の仕事がある中で全く無駄な仕事というものはあるのでしょうか。誰でも得意な事、好きな事は進んでやるし、苦手な事、嫌いな事はやりたくないものです。すべてが快く出来ればいいのですが、時にはそうでないこともよくあることです。これは私がすることではないとかこんなことをしても無駄だと思ふことはありませんか。

ところがやがて中堅になり、仕事を任されたりあるいは新しい事を始めるようになった時、それまでにいろいろと多くの経験を積んだことが役に立ち仕事に活かされて、結果的には今までの仕事のどれもが自分にとって貴重な財産になっていたことが分かります。その時にはなぜこんなことを私がと思うのですが、過去の経験はいつかどこかでまた役に立つ日が来るものです。仕事には無駄な仕事というものはないように思います。

いつも何かと時間に追われて忙しい毎日ですが、廻ってきた仕事はいい経験になると解釈して（諦めて!）何事にも取り組んでいきましょう。

# 薬剤科紹介

独立行政法人 国立病院機構 宇多野病院

## I：環境

当院は嵐山に近く、京都市の北西にあり、緑地風致地域に所在しています。付近には嵯峨野の大覚寺や高雄の高山寺、御室仁和寺、竜安寺、金閣寺等、名勝旧跡がたくさんあります。四季折々風光明媚な景色がひろがり、療養環境に恵まれています。



## II：概要

国立病院機構ネットワークの脳・神経筋疾患の基幹医療施設として「関西脳神経筋センター」および京都市右京区唯一の公的医療機関としての「京都市西北部基幹医療施設」の2つの機能を持つ病院です。

また、免疫性疾患および長寿医療専門施設の機能もあわせて担っています。

宇多野病院の機能の特徴を紹介いたします。

- ① 関西脳神経筋センター
- ② 京都市基幹医療施設
- ③ リウマチ関節センター
- ④ 筋ジストロフィー病棟
- ⑤ 京都府難病相談支援センター

## III：薬剤科について

薬剤科スタッフは薬剤科長、副薬剤科長、調剤主任、治験主任、常勤薬剤師4名、

非常勤薬剤師 2 名の計 10 名です。



調剤業務・医薬品管理・DI 業務・薬剤管理指導業務・TPN や抗リウマチ薬の無菌調製  
・治験薬管理業務を行い、ICT・NST・褥瘡委員会にも積極的に参加しています。  
業務終了後に院内勉強会や院外で行われる勉強会にも朝礼時に伝達し参加しています。

#### <調剤・薬剤管理指導業務>

電子カルテを導入しており、薬剤科だけでなく病棟でもカルテを確認することができます。

簡易懸濁を導入しており、内服薬の経口投与が難しい患者さまへ粉碎による薬剤投与量の減少を回避でき、薬剤の物理・化学的安定性に影響を与えません。

処方箋にも指示の記載が反映されています

#### <無菌調製>

TPN 無菌調製のマニュアルを作成し、該当患者さまの無菌調製を行っています。  
さらにリウマチ科の短期入院の患者様や外来化学療法室での生物学的製剤使用の患者さまの薬剤の無菌調製を 2009 年 10 月より開始しました。これにより今までは入院して抗リウマチ薬の投与を受けられていた患者さまが外来にて受診・施行されることで入院の必要がなくなるため経済的負担が少なくなり患者さまの QOL も維持できるようになりました。薬剤師がクリーンベンチ内で混注することで製剤の安定性・安全性を担保しています。

<チーム医療>

褥瘡委員会・ICT・NSTなどに参加して他職種のスタッフと協力しています。

<カンファレンス・回診>

回診は脳外科・整形外科、カンファレンスには脳外科・リウマチ科に参加しています。

<治験薬管理業務>

治験管理室には治験主任・常勤薬剤師1名を配置しています。

パーキンソン病を始めとし様々な治験を実施しており、事前の治験薬説明会では正確かつ迅速な調剤が行えるよう活発な討議が行われています。

<現在の取り組み>

① 薬剤管理指導業務の完全実施

21年度計画として1月あたり500件の指導件数、退院時指導の件数増を目標に科員一丸となって頑張っています。

② 無菌調製

TPNでは1月300件の調製を目標にしています。

最近では400件近い調製を行っています。

抗リウマチ薬の調製は10月から開始しており、現在調製件数を順調に伸ばしています。

③ 後発品の利用促進

薬務担当者による綿密なリサーチ・薬事委員会での審議のもと後発医薬品の採用・切り替えの促進をすすめています。

④ 教育研修

6年制学生実習の受け入れを見据え、担当区分の明確化を行い、6年制学生実習の受け入れ体勢を整えています。

⑤ リスクマネジメント

院内の薬剤に関するリスクを把握し、医療事故や調剤過誤、ヒヤリハット事例が起こった際にはその都度、原因を解析し、今後の防止策を講じています。

⑥ 臨床研究

個々にテーマを持ち、4半期に1度発表の場を設けており、学会発表および論文投稿を目標に取り組んでいます。

# 平成 21 年度近畿国立病院薬剤師会臨時総会報告

近畿中央胸部疾患センター 宮部 貴識

平成 21 年度近畿国立病院薬剤師会臨時総会が平成 21 年 10 月 3 日（土）KKR ホテル大阪にて開催された。

14 時、小森副会長の開催の辞により臨時総会が開始となり、小原会長から挨拶、引き続いて中多泉薬事専門職より挨拶を頂いた。

議長には舞鶴医療センター覚野副薬剤科長が選出され、委員会のあり方プロジェクト検討の経緯報告、会則等の改定について審議され承認された。

今年度は会長の任期満了となるため、山崎選挙管理委員（広報担当理事）より来年度に向けた会長選挙が告知された。続いて OSCE 評価と評価人員についての説明と報告があり、最後に小森副会長の閉会の辞により無事、臨時総会が終了した。

日時：平成 21 年 10 月 3 日（土） 14:00～14:45

場所：KKR ホテル大阪（星華の間）

出席者数：出席者 88 名、委任者 108 名

会則第 12 条に従い、会員過半数出席により総会が成立

報告および審議事項

## I. 報告事項

### (1) 委員会のあり方プロジェクト検討の経緯

本田プロジェクト会議議長より委員会のあり方プロジェクト検討の経緯について報告があった。

### (2) 22 年度会長選出について

山崎選挙管理委員より 22 年度会長選出について、また栗原総務担当理事より今後のスケジュールについて説明があった。

## II. 審議事項

### (1) 会則等の改定について

小原会長より会則等の改定案についての説明があった。

- ・現在の 3 委員会を 2 委員会（教育研修・業務検討）とする。
- ・部会を新設する。
- ・常任理事のうち委員会委員長も会長が委嘱する。など

以上について審議の結果、賛成多数で承認された。

その他

栗原総務担当理事より各大学への OSCE 評価者の派遣について、薬剤師会として一括して対応する旨の説明があった。

## 臨時総会講演会（呼吸器感染症）の感想

近畿中央胸部疾患センター 鷺巣 佳子

秋らしい空を感じられるようになったころ、10月3日に近畿国立病院薬剤師会の臨時総会が開催され、引き続き特別講演会が開催された。

今まさに、新型インフルエンザが流行し、感染症は社会的にもトピックスとなっている。また、医療の現場でも日々その対応に追われ、混乱も生じている。今回の特別講演会はこの新型インフルエンザ感染症にも関連し、私が勤務している近畿中央胸部疾患センターで感染症を専門にされている露口一成先生が『呼吸器感染症について』をテーマに講演された。

講演は、近畿中央胸部疾患センターが結核病棟、一般呼吸器内科病棟、外科病棟、肺がん病棟の4つの病棟に大きく分かれているという紹介から始まった。どの病棟も呼吸器疾患の患者さんが治療を受けており、感染症を患っている方は少なくない。私が服薬指導を担当している病棟は感染症治療も行われている一般呼吸器内科病棟であり、そこは露口先生が受け持っている病棟の1つである。

私は服薬指導を始めて間もない時期に今回の講演を聞いたことで、先生が受け持つ感染症の分類、症状の特徴、治療等の基本をととても分かりやすく知ることができた。呼吸器は生命活動を維持するのに不可欠であるため、その感染症は重篤になると致命的である。呼吸器感染症は症状や画像所見だけでは疾患を断定できないことや、起因菌を明らかにするために精密検査を行い、患者の背景等を考慮した正確な診断が必要とされることがわかった。疾患の鑑別を誤れば、効かない抗生物質を投与することになり、病気を進行させてしまう場合があるので、感染症の診断は医師にとって慎重を要する仕事だということが理解できた。

今回の講演を聴いて感染症に関する臨床的な知識をさらに増やし、病棟で医療チームの一員として力になりたいと思った。そのために、医師や看護師の仕事を理解した上で、薬剤師には何が求められているかということを考えられるように勉強していきたいと思う。今は医療チームの中で、薬剤師として積極的な情報提供や提案が出来るように心がけている。



## 第17回クリニカルファーマシーシンポジウムに参加して

福井病院 中西 陽一

平成21年7月11日・12日の2日間に渡り、京都国際会議場で開催されました医療フォーラム2009第17回クリニカルファーマシーに参加させて頂きましたので報告致します。今回は、例年以上に1960人と非常に多くの参加者で賑わい、活気で満ち溢れた会場でした。プログラムは、特別講演・教育講演・シンポジウム・一般演題と311の演題数で構成されており大変充実した内容であり、比較的ゆっくりと聴講・閲覧できる日程でした。

今回のテーマが「輝ける医療薬学の確立にむけて—想像と調和と信頼—」ということで、どの講演も今後の薬剤師の方向性について検討する内容が多くありました。その中で2日目のシンポジウム7「臨床研究能力の維持向上を通じて教育に貢献するために」と題して、金沢大学医学部附属病院の河原昌美先生が語られた講演に大変関心を抱きました。その内容は今後の薬剤師に求められるスキルとして、臨床で遭遇した疑問や問題点を適切に把握し、それらを解決し、それを題材に研究論文を発表して臨床にフィードバックし、よりよい医療の向上に貢献して行くというものでした。現在、薬剤師の業務拡大や展望について多く語られている中、この考えはすべてにおいて基盤となりうるものだと感じました。また、他の講演では薬剤師の今後の業務拡大に関して、医師に代わって検査値のオーダーやバイタルの測定などを行うといったスキルミックスに関する話題がいくつもあげられていましたが、その発想もこれらの考えが根底にあるのではないかと思います。まずは探究心を持ち、医師とは別の視点で薬物療法を追及していくことが大切だと感じました。

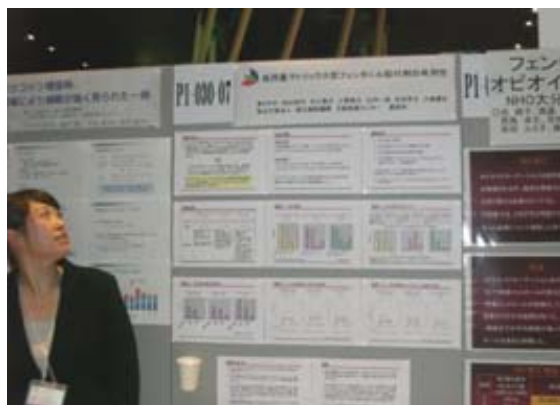
一方、一般演題でもスキルミックスの実践について発表されている演題がありました。医療法人蘇生会総合病院では、がん化学療法において“薬剤師が医師に代わって抗がん剤の投与量の設定や処方オーダーを行っている”との大変画期的な活動をしているといった内容でした。最終的には、医師の承認を経て処方をオーダーするわけですが、投与経路や投与速度も薬剤師が担うということに大変驚きました。

これから、私たち病院薬剤師を取り巻く医療情勢が刻々と変遷していく中で、今回の講演を通じそれに応えるべく今後の病院薬剤師の役割がますます重要になってくることをひしひしと実感させられました。私も今後5年先、10年先の自分を見据え自己研摩に励み、少しでも医療に貢献できる病院薬剤師を目指していきたいと思います。

## 第 63 回国立病院総合医学会に参加して

大阪医療センター 東 さやか

今回、2009年10月23、24日に開催された第63回国立病院総合医学会にて、「低用量マトリックス型フェンタニル貼付剤の有用性」と題して発表した。昨年7月にマトリックス型フェンタニル貼付剤が発売され、それに伴い新規格であるMT2.1mgが追加となった。そこで、既存のリザーバー型貼付剤との副作用やNRS、レスキューの変化などを比較検討し、マトリックス型貼付剤の有用性について調査し報告した。



国立病院総合医学会は薬剤師だけではなく、他職種の発表や意見を聞くことができ、患者や家族への関わり方や、薬剤師として治療、QOLの向上にどのように携われるかなど、新しい見解を知ることが出来た。医療人だけでなく、事務やシステムエンジニアなどの発表もあり、様々な職種によって医療が成り立っていることを再認識する良い機会であった。また、転勤の多い国立病院機構の職員にとって、転勤前の懐かしい人々との再会も国立病院総合医学会の特徴ではないだろうか。

国立病院総合医学会はポスター発表でも2分間の口頭発表がある。2分という限られた時間の中で、伝えたいこと全てを発表することは難しく、重要ポイントの抽出法や声の大きさなどを学ぶことが出来、通常業務にも活かせる様努力して行きたい。

最後になりましたが、このような発表の機会をいただいたこと、御鞭撻いただいた先生方に深く御礼申し上げます。

今年の国立病院総合医学会は仙台市で開催された。仙台駅を降りると国立病院総合医学会歓迎の文字があり、仙台市全体で本学会を盛り上げようと、駅構内に全ブロックの病院ブースが作られており、一般の人が全ブロックの病院を身近に感じられるように工夫されていると感じたと同時に、国立病院の規模の大きさに感心してしまった。



## 第 19 回日本医療薬学会年会に参加して

大阪南医療センター 田路 章博

平成 21 年 10 月 24 日～25 日の 2 日間にわたり、長崎ブリックホールほかにて第 19 回日本医療薬学会年会が開催された。私は本年会に参加し、「薬剤師の介入による抗菌薬適正使用への取り組み」という演題でポスター発表した。感染制御分野における薬剤師の責務は抗菌薬適正使用の推進であり、ICT 活動が盛んな施設では様々な手段を用いて抗菌薬適正使用を実践している。今回は、当院の抗菌薬適正使用法について発表したため、その概略を報告する。

当院の ICT は特定抗菌薬届出制や許可制が未導入であり、また患者回診、抗 MRSA 薬の TDM、抗菌薬使用状況の報告も未実施であった。そのため安易な広域抗菌薬使用例が散見され、使用量の増加や使用期間の長期化が懸念されていた。そこで抗菌薬使用状況の報告を手始めに、平成 21 年 1 月より抗 MRSA 薬の TDM と指定抗菌薬（第 3・4 世代セフェム系、カルバペネム系、ニューキノロン系、抗 MRSA 薬）長期使用例（最近 2 週間以内で連続 5 日以上使用し、現在も投与継続中の患者）の抽出を開始し、対象症例の処方意図などを確認した後、PK/PD に基づいた抗菌薬投与法を推奨した。

TDM 実施前の平成 20 年 12 月と平成 21 年 5 月のデータを比較すると、指定抗菌薬の平均使用量（AUD 換算）割合が減少し（42.7→31.4%； $p<0.05$ ）、ペニシリン系抗菌薬の使用量割合が増加した（17.1→32.5%； $p<0.05$ ）。また、指定抗菌薬の平均使用期間が短縮し（10.8→6.9 日； $p<0.05$ ）、指定抗菌薬以外の平均使用期間も短縮した（5.6→3.8 日； $p<0.05$ ）。また病棟での薬剤師の必要性が認知され、薬剤師が抗菌薬処方設計へ介入できるようになった。

当院の取り組みによる抗菌薬使用状況の変化は、3 つの抗菌薬関連システムを開発・導入したことによると考える。そのシステムとは、①抗菌薬の使用量、日数、患者数を診療科別に一括集計しグラフ化できる、②指定抗菌薬の長期使用例をリストアップし表にできる、③アンチバイオグラムを簡便に作成（データ更新は 1 回/月、約 30 分程度）でき、感受性パターンも確認できる（大阪大谷大学との共同研究）ものである。①、②は、当院オペレーターとの共同作成であり、3 段階程度の簡単操作であるため、誰もが同じ資料を短時間（約 30 分程度）で作成でき、日常業務の効率化と抗菌薬使用状況の確認が簡潔に行えるようになった。一方③は、大阪大谷大学 初田泰敏先生が作成したシステムに当院の細菌検査結果を反映させたものであり、当院の最新の抗菌薬感受性を瞬時に確認できるシステムである。指定抗菌薬使用例を抽出後にその抗菌薬選択の妥当性が確認でき、また主治医へ新たな抗菌薬を紹介する際のエビデンスとしても使用でき、当院オリジナルの抗菌薬選択基準を設けることができた。

当院の取り組みは、オーダーリングシステムを利用した 3 つの抗菌薬関連システムと、ICT 薬剤師と病棟薬剤師の密接な連携を駆使した迅速で正確な対応が特徴である。抗菌薬適正使用法は各施設において様々であるが、特定抗菌薬届出制や許可制を実施するよりも、患者の状態や状況に応じた迅速で正確な対応が可能であれば、抗菌薬適正使用は必然であり、

当院の取り組みは薬剤師が抗菌薬適正使用をリードし得ることを実証したと考える。また当院の取り組みは、抗菌薬使用状況を適時適切に把握する必要があったが、約30分で抗菌薬使用状況の確認ができ、その抗菌薬選択の妥当性も簡便に確認できるようにした。これらのシステムのために業務負担が軽減し、データを利用した迅速で正確な対応が可能となり、チーム医療ひいては病院経営に貢献できたと考える。

最後に、私は本学会に参加し、演題発表のみでなく他施設の人々と意見交換ができたこと、様々なシンポジウムを聴講し、薬物動態や感染制御の知識をより幅広く、より深く習得できたことにより、自分の視野を広げることができたと思う。また一般口演やポスター発表では、大学と病院との共同研究が印象的であり、基礎研究を臨床に応用させた報告が増えてきた様子も伺えた。本学会発表を通して、自施設における業務内容の再確認、最近のトピックスや他施設の現状把握も行うことができ、非常に有意義であった。学会は研鑽を積む場として最適であり、今後も出来る限り演題発表し、積極的に参加したいと思う。

## 編集後記

★師走に入り、寒い日が続きますが、皆様、体調はいかがでしょう。猛威を奮っていた新型インフルエンザも少しずつではありますが、右肩下がりの模様です。巷では、新型ワクチンが不足しているようですが、ある都道府県では、施設への押し売り？もあるような・・・どうなってるんでしょう〇〇知事!!!

★国家公務員のボーナスは、過去最大の引き下げでした。また、12月から基本給も下がり辛い年の瀬です。そんななか恒例の某医療センターの忘年会は、10大ニュースの発表から、手相占いのおばちゃん、サンタさんの登場、新人の出し物等々大盛り上がりだったようです。今年の嫌なことは忘れ、来年はもっといい年になりますように。

★今年の流行語大賞は、「政権交代」でした。近畿国立病院薬剤師会も来年度から会長も交代となり体制もリニューアルされます。広報委員会も半数の先生が交代することになりました。これまでご支援ご協力頂き、ありがとうございました。新体制のもとでも同様よろしくお願ひします。

(K. Y)

近畿国立病院薬剤師会会誌

第二十号 平成21年12月発行

発行元 近畿国立病院薬剤師会事務局

大阪市中央区法円坂2-1-14

(独立行政法人国立病院機構大阪医療センター薬剤科内)

発行人 会長 小原延章 (循環器)

編集 広報担当理事 山崎 邦夫 (刀根山)

広報委員 石塚 正行 (神戸医療)

中西 彩子 (大阪南医療)

廣畑 和弘 (近畿中央)

堀内 保直 (滋賀)

本田 富得 (神戸医療)

宮部 貴識 (近畿中央)

矢倉 裕輝 (大阪医療)

山内 一恭 (大阪医療)

近畿国立病院薬剤師会ホームページ <http://www.kinki-snhp.jp/>